

U-22 審判員夏季研修会 参加報告

北海道 2 級審判員 鈴木辰汰

参加日時 2024年8月7日
2024年8月25日～8月29日
場所 鹿島ハイツスポーツプラザ（茨城県鹿嶋市）
参加者 U-22 2 級審判員 18名
INS 4名

7日（水） 事前研修会

- ◎今回の研修会の位置付け等の説明
- ◎大会について（TRAUM CUP 東日本 2024 in SUMMER）
- ※今研修会はこの大会のスタッフ業務も研修会の内容であった。
- ◎自己紹介
- ◎大会に臨むにあたり
 - ・サッカーの4フェーズについて
 - ・現代サッカーのトレンドとは
 - ・熱中症対策

25日（日） 研修会（場所：神宮ホテル）

- ◎今回の研修会の位置付け等の説明
- ◎大会について（TRAUM CUP 東日本 2024 in SUMMER）
- ※今研修会はこの大会のスタッフ業務も研修会の内容であった。
- ◎自己紹介
- ◎大会に臨むにあたり
 - ・サッカーの4フェーズについて
 - ・現代サッカーのトレンドとは
 - ・熱中症対策

26日（月） 大会1日目 予選ラウンド

担当試合 亜細亜大学 VS 大阪体育大学 A

結果 1 - 3

主審：鈴木辰汰 副審：松元清惺氏、チーム帯同審判員

担当 INS：佐藤貴之氏

〈自分の振り返り〉

普段担当することのないレベルの試合で最初は何とかがついていくことに精一杯であった。ゲームとして非常にインテンシティの高い締まったゲームであっただけにホールディングの反則をどこまで許容するかを常に頭を悩ませながら行っていた。そんななか、後半に著しく不正なファウルとなる事象があり、その際に自信をもって判定ができたことは非常に良かった点であると思う。

〈INSからのアドバイス〉

- ・ゴールキックなどのある程度見る時間があるときはボールよりもその先のマッチアップを見てホールディングをどちらが先にやったのかを見る
- ・ゴールキックの際に安易にサークル付近に立つのではなく基本のポジションに立ち開いた視野で見る
- ・アシスタントサイド、レフェリーサイドともにペナの端までは近づきたい
- ・ホールディングのファウルで一番気を付けなければならないのがその後の報復行為。それをさせないために選手のテンションや表情などをピッチで汲み取る

全体ミーティング（場所：神宮ホテル）

- ・サッカーの4フェーズについて
 - ・現代サッカーのトレンドとは（ハイプレス、ビルドアップ、セットプレー）
- ハイプレスのチームに対してはしっかりしたまで落ちて何かあったときに適切な対応ができるポジションをとる
- ・各INSの方から今日を終えて

27日（火） 大会2日目 予選ラウンド

担当試合 流通経済大学 VS 東京国際大学

結果 8 - 1

主審：鈴木辰汰 副審：チーム帯同審判員

担当INS：正木修一氏

〈自分の振り返り〉

パスサッカーを主とするチームの時の立ち位置が自分の中で課題で巻き込まれ癖がある中での試合であったため考えながら非常にためになる試合だった。基本的な攻撃の帰着点はサイドであったのでペナの中、外の監視を意識して行ったがそこにばかり意識して一番重要なゴール前との争点との距離が離れてしまった。

〈INSからのアドバイス〉

- ・パスサッカーのチームには走るというよりもいかにポジション修正を行えるかが大事

- ・一番大事なものはゴール前。そこには極端にボックスの中に入って監視することも一つの方法

全体ミーティング（場所：神宮ホテル）

- ・ホールディング、ハイボールの競り合いの際に見る、気を付ける所についてのグループ討論

→ホールディングが起きる時とは？

ホールディングの時に何を意識して吹く？

ハイボールの競り合いはどのような反則が考えられる？

未然に防ぐには？

→基本的に意識するのはそもそもファウルを起こさないようにすること。そのためにキーとなるところにあえて近づいておくなどの対応をする。

ファウルはファウル。ダメだと思ったら吹く。やらせるとノーファウルは似ているようで全く違い、やらした結果ストレスがたまれば本末転倒。

反則はアプローチ→コンタクト→結果で見ることが大事

- ・各 INS の方から今日を終えて

28日（水） 大会3日目 決勝トーナメント、順位決定リーグ

担当試合 準決勝

大阪体育大学 B VS 関西学院大学 A

結果 0 - 2

主審：鈴木辰汰 副審：チーム帯同審判員

担当 INS：角山勝洋氏

〈自分の振り返り〉

大会3日目、準決勝ということもありとにかくチャレンジをしようという気持ちで臨んだ。マネジメントの部分やボックスに入る意識、下でのつなぎを降りて監視するといったところを意識して行ったが途中で抜ける場面がいくつかあったので習慣化していきたい。また、一つハイボールのジャッジミスをしてしまいそこからゲームの温度が上がった中で、警告を退場と判定するミスをしてしまいコート内で自分だけが浮いてしまい一気に5、6人に囲まれるという審判人生初の経験をした。自分だけが浮いているのは感じたので恥を捨てて副審にきちんと情報もらいに行き警告にしたのはその後のゲームを落ち着かせるためにも適切だったと思う。その後、うまく切り替えゴール前でアドバンテージを適用しゴールにつながったのは良かった点であると思う。

〈INSからのアドバイス〉

- ・退場を警告に落とした判断はその後の状況を考えて適切であった。

- ・そもそもそのように判定してしまったのはコンタクトを動画ではなく写真で判断したから。アプローチ→コンタクト→結果を適切に見抜く
- ・前半の飲水後にホールディングの基準を上げたのは良かったが、試合を通してみると少し一貫性がなかった。
- ・走行距離も大事。だが一番は、何のために走るのかという本質を忘れないこと
- ・ペナルティーエリアのポケットまで入るぐらいの気持ちで突っ込むとよい

全体ミーティング（場所：神宮ホテル）

- ・今回の研修会の振り返り、参加者に向けて一人一人発表
- ・各 INS の方から今日を終えて

29日（木） 大会4日目 決勝トーナメント、順位決定リーグ

担当試合 三位決定戦

関西学院大学 B VS 大阪体育大学 B

結果 5 - 2

主審：鈴木辰汰 副審：中川航氏、チーム帯同審判員

担当 INS：高橋早織氏

〈自分の振り返り〉

最終日であったが今回の研修会で一番足が動いたこともあり判定の際の距離や、ボックスに入る意識を一番意識して取り組めたと思う。その為マネジメントに関することを考える余裕が生まれたので積極的にチャレンジすることができた。ホールディングの反則に関しても一貫してできたと思う。選手たちと一つのゲームを作り上げている感を始めてこんなにも実感することができた非常にいいゲームであった。

〈INSからのアドバイス〉

- ・今回の時間を使ったマネジメントにより落ち着いた選手が何人もいて今回はそのやり方でマッチしていたが、見ている人によっては話過ぎと思われる。そのゲーム、その選手に合ったマネジメントを見極める必要がある。
- ・競技のレフェリングと教育のレフェリングは違う。そこの違いを感じる必要がある。
- ・ファウルを吹く際に DF の行動や動きだけでなく、OF 側のファウルを受けた際の反応がアクションなのかリアクションなのかを見る。
- ・スプリントに力があるのだからもっと深いところまで降りて監視しても間に合うのでは？
- ・自分の見たものを信じて吹く。

- ・CKのポジション争いの時、全体に対して大きな声で伝えるだけでは効果が薄いため引き出すことがそのあとのことも考えると効いてくる。
- ・スプリントスタートの時の1歩、2歩に力強さが欲しい。

今回の研修会を終えて

自分としては初めての道外研修会で移動から経験したことの少ないことばかりで大変でしたが、上を目指していく中でこのような経験を早い段階で経験できたことはこれからの審判人生に非常に生きることであると感じました。また、今大会は自分たち研修会参加審判員が大会の運営を一から行うもので日頃当たり前になっている試合環境の整備や運営が決して当たり前ではないということを再認識する貴重な機会となりました。今回、自分はマネジメントと、走るということを目標に研修会に臨みましたが、やればやるほど新しい課題が生まれてきて、その課題を今大会で課題解決に向けてのヒントを得ることができたのでこれからの審判活動に生かしていきたいと思います。

研修会では台風10号の影響で18名の参加者から7名が途中離脱を余儀なくされ、最後まで全員で行うことは残念ながらできませんでしたが、全国各地の同世代の審判員と切磋琢磨できたことを大変うれしく思います。今回の経験を決して無駄にせず一から審判活動に励んでいきます。

今回の研修会に派遣して頂いた北海道サッカー協会の皆様、研修会を主催、運営、指導して頂いたJFAの担当者の方、INSの方々、大会成功に向けてご尽力して頂いた大会関係者の方々、チーム関係者の方々。今回はありがとうございました。

